

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷二十五第

月六年六十和昭

哀辭 故山本博士遺影及署名

論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者労働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

時論

重慶政府の戦時物價政策……………十龜盛次

記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

山本先生を偲ぶ

堀江保藏

先生の講義

『小著過つて世の注意を惹き』云々の、あの名文の序文を附した「植民政策研究」の第七版、それは私が大正十四年に京大經濟學部へ入學した年の先生の講義の教科書である。植民は植民にして殖民に非ず、この語義並に定義を以て始まる先生の講義から、私は何よりも先づ先生の胸裡に燃える理想主義を學んだのであつた。高等學校及びそれ以前の學校では、凡そ政策なる概念を教へられず、學ぶところは、大體事實の認識と倫理的思索とに外ならなかつたのであるから、經濟學

部へ入學した當初の私は、政策と名のつく講義には甚だ興味を感じたものであるが、わけても先生の植民政策の講義に於ては、その底を一貫して流るゝ理想主義に頗る惹きつけられたものである。

翌年は先生の工業經濟論の講筵に列した。學生仲間では、先生の講義ノートは褐色であるといふのが専らの評判であつた、けれども私にとつては、それが二度目、三度目の講義であるわけではなく、始めて聴く講義であるから、この評判に別に氣を留めないで、熱心に筆記した。苦汗制度の説明など今尚ほ耳底に鮮かに残つてゐて、植民政策の講義と同様、そこにやはり先生の理想主義を汲み取ることが出来た。

先生の講義は、普通にいふ意味での熱のある講義ではなかつた。講義口調に派手な抑揚があるわけではなく、身振りに目立つたヂェスチュアがあるわけではなく、實に平々坦々たるものであつた。教壇の椅子に終始腰を下ろして、眼は開くが如く開かざるが如く、右手を額に翳すやうにして、諄々として説かれるその

講義振りは、一部學生の間に一種の物足らなさを感じしめたことは事實であらう。けれどもその底を流るゝ理想主義は燃えるが如く、特に植民政策に於ては、その經濟問題より教育問題に至るまであらゆる問題を取り上げて、政策の高い基準を掲げられ、いはゞ潜熱の頗る熾烈なものを感じさせられたものである。

當時は所謂社會科學研究の華やかな時代であつた。併し先生にはかゝる風潮の影響は殆ど見られなかつた。『山本先生でも臺灣へ行かれると××がつくといふ話だぜ』などとひやかし半分に噂するものもあつた程である。それが事實であつたかどうかは知る由もないが、とに角先生の理想主義は當時の我國の植民政策の現實を遙かに抜いてゐたことは事實であつて、今日南進基地として頗る重要な役割を課せられてゐる臺灣を思ふとき、うたゝ先生の政策理想が追懐せられるのである。

先生と朝鮮産米増殖計畫

大正十四年は朝鮮産米増殖計畫が確定した年である。朝鮮總督府では既に大正九年に、十五ヶ年で四十萬町歩の土地改良計畫を樹てたけれども、工事費の騰貴や政府補助金の減額などのために、六ヶ年を費して僅に九萬町歩の改良を實現したに過ぎなかつた。そこで増殖計畫の建直しとなつたのであるが、新計畫は、十ヶ年間に凡そ三十五萬町歩の土地を改良し、之に農事改良事業を加へんとする尠大なもので、計畫完成の曉には八百二十萬石の増収が期待せられるけれども、經費として實に三億三百萬圓餘を要し、當時の我國の財政經濟状態から見れば、頗る大事業であつた。

この計畫は、内地の行詰つた食糧問題、毎年殖える朝鮮の人口問題、朝鮮農民の生活改善問題、此等諸問題を解決せんとして樹てられたものであるが、内地の農村では、米價を益々不味ならしめて疲弊し切つた農村に又一つの重荷を加へるものだと非難があり、朝鮮でも朝鮮を植民地扱ひにしてその産米を内地へ奪ひ取るものだと非難があつた。また大藏當局は、多額

の補助金支出を要するの故を以てこの計畫に難色を示した。けれども時の政務總監下岡忠治氏等の身命を賭しての奔走は遂に功を奏し、この年十一月二十四日頃、結局十ヶ年計畫を十四ヶ年計畫に改めることによつて計畫は確定したのである。

朝鮮産米増殖計畫を長々と書いたのは、外でもない山本先生がこの計畫の絶大な支持者であり、ある意味でかくれた功勞者であつたからである。試みに「經濟論叢」の十五年一月號に載つてゐる先生の「朝鮮産米増殖計畫と世論」を見ると、それは「朝鮮統治の第一義を産業の奨励に置かんとする所謂産業第一主義なるものは、故下岡政務總監に至りて高調せられたる所のものであるが、植民地の統治者が統治の根本義を此處に置かざるべからざることを悟り來れるは、時期稍や遅きの憾みなきにあらざるも、尙ほ之を悟らざるに優ること遙かなりと言はねばならぬ」と冒頭し、計畫に對する世の反對論は、該計畫の内容を精査せざる輕卒な論斷に非ずんば、朝鮮の實情に關する極めて不完全な

知識に立脚した議論に過ぎぬとなし、それが世を誤る以外に何等の價値なきものであると、手ひどく攻撃して居られる。

そして計畫の立役者にして、計畫確定後間もなく物故せられた下岡總監は、東上の途中京都に下車して、山本先生に意見を徴されたといふ風の話が講義のうちに洩れたことを記憶してゐる。

植民政策の試験問題にはこの産米増殖計畫が出るぞといふわけで、新聞の切抜を集めたりして大いに勉強したものであるが、山は巧みに外されてゐた。けれども、産米増殖計畫が立派に實を結んで食糧問題が一應解決せられたことを思ひ、更に今日同じ問題が改めて重要問題となつたのに直面して、産業主義を以て植民政策殊に朝鮮統治策の第一義とせられた先生の在りし日の面影を偲び、感慨新たなるを覚えるのである。